

「ジェンダー化されたセクシュアリティ」について

—— あるいは「セクシュアリティのジェンダー化」とは ——

植 村 恒 一 郎

On the “Gendered Sexuality”

—— What is the “Genderization of Sexuality”? ——

Tsuneichiro UEMURA

I 「セクシュアリティ」とは？

現代のジェンダー論においては、「ジェンダー」と対概念をなすものは必ずしも「セックス」ではない。1980年代以降に「ジェンダー」の概念が深化し、それまで「ジェンダー」という概念は「セックス」という概念と対をなしていた状況が変わり、新たに「セクシュアリティsexuality」という概念と対をなすようになった。つまり、「セックス」が「セクシュアリティ」に取って替わられたのである。これはどういうことだろうか。また、そのことによって何が変わったのだろうか。それを考察するのが本稿の課題である。

1970年代までは、「ジェンダー」という概念は、「セックス」という概念と対になり、次のように説明されてきた。「ジェンダー」とは、元来は名詞の性別を表す言語学的概念であったが、フェミニズムにおいては、「男女」という性別は、生物学的文脈と社会的・文化的文脈の二つがあり、前者が「セックス」、後者が「ジェンダー」である、と。ところが1976年に、フーコー『セクシュアリティの歴史』（邦訳タイトルは『性の歴史』）が刊行され、「セクシュアリティ」という概念が注目されるようになった。また、1990年に刊行されたジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル』は、「セックス」という概念そのものが「ジェンダー」に依存したものであり、「異性愛」は何ら「自然」ではなく、人為的なものであると主張して、大きな衝撃を与えた。このような経緯において、「ジェンダー」の対概念となるものが、「セックス」から「セクシュアリティ」に替わっていったと考えられる。

「セクシュアリティ」という言葉は、生活の中で自然に使われてきた日常言語ではなく、フロイトが学問的な概念として用いた「Sexualitaet」に由来する。たとえば、フロイトの論文「神経症の病因における性 Die Sexualitaet in der Aetiologie der Neurosen」（1889）、「性理論三篇」の第二篇「幼児の性愛 Die infantile Sexualitaet」（1905）などに見るように、「Sexualitaet」は、フロイトにおいては「性」を表す重要な学問的な概念である。だが日本語訳は、「性」「性欲」「性愛」「性的現象」など一定していない⁽¹⁾。フロイトがフランス語に翻訳され、フランス語「セクシュアリティ」が用いられるようになったが、邦語タイトル『性の歴史』として刊行されたフーコー『セクシュアリティの歴史』は、訳者の渡辺守章によれば、最初は『性現象（セクシュアリティ）の歴史』と題したかったが、出版社の意向でかなわなかったという⁽²⁾。以上から分かるように、「セクシュアリティ（セク

シュアリティ)」は、日本語訳が決まらないために、結局、「セクシュアリティ」という英語の片仮名表記のまま用いられることになった。「ジェンダー」と同様、今後もそうではないかと思われる。

「セクシュアリティ」を定義するのは非常に難しい。岩波『女性学事典』(2002)では、次のように説明されている。「性にかかわる欲望と観念の集合。最初日本に紹介されたときは“性的欲望”と翻訳されたが、のちに性にかかわる現象の総体を示す用語として“性現象”と呼ばれるようになった。人間の性行動にかかわる心理と欲望、観念と意識、性的指向と対象選択、慣習と規範などの集合を指す」とされている (p293、上野千鶴子執筆)。「下線は植村による、以下同様」また、2013年に『ジェンダー論をつかむ』を刊行した千田有紀は「セクシュアリティ」を次のように説明している。「セクシュアリティを定義しようとするのは、難しいことです。……ここではとりあえず、性に関する身体の機能とイメージの総体のことであるとおきましょうか。……重要なのは、ジェンダーを内に含まないことだと思います。なぜならセクシュアリティとジェンダーを別々に分離することによって、みえてくるものがあるからです。」(p22) このような「セクシュアリティ」の説明から見えてくるのは、「セクシュアリティ」とは、性にかかわる多様な現象、欲望、イメージ、意識などをゆるやかに包括する概念であり、幾何学の定義のように、定義項と被定義項が厳密に対応するようなものではない。それは、ウィトゲンシュタインが「家族的類似性」と述べたように、概念を構成する諸要素の内実が、その語を使う人の中で重なり合いながらも、少しずつ差異をもってグループを形成しているような概念である。

とはいえ、以上からだけでも「セクシュアリティ」概念のもつ重要な特徴が指摘できる。それは、「セックス」が生物学的性別であり、純粋な生物学的概念であるのに対して、「セクシュアリティ」は人間学的概念だということである。「セックス」は、すべての有性生殖する生物のオス・メスという次元の規定であり、たしかにその規定はヒトにも当てはまる普遍的概念である。それは、生殖に関わる医学的レベルではもちろん重要な規定であるが、普遍的概念であるだけに、我々人間の一人一人の個性差には関わらない。それに対して「セクシュアリティ」は、生きている人間一人一人がもつ性的な欲望、観念、意識である。それは主体である個人に即して存在する規定であり、自分で見たり感じたり想像したりする体験から成っている。その内実は、異性愛、性同一性障害、同性愛では大きく違うであろうし、同じ異性愛であっても、一人一人微妙に異なっているだろう。有性生殖生物に汎通的な規定であるオス・メスに関わる「セックス」とは異なり、「セクシュアリティ」は何よりも人間学的な「性」概念であり、個性差を大きく許容する概念なのである。

では、「セクシュアリティ」概念が、従来の「セックス」概念に取って替わることによって、それと対概念である「ジェンダー」の方はどのように変わってくるのだろうか。岩波『女性学事典』は次のように説明している (p163~165、竹村和子執筆)。まず、「ジェンダー」の定義として、「社会的性役割や身体把握など文化によってつくられた性差」とある。ただし、この定義には「文化によってつくられた性差」が「男」「女」の二つのみであるとは書かれていない。そして、定義の次には、次のような説明がある。「……男女の二分法を前提とする生物学的な基盤論を排し、ジェンダーが2つの項ではなく1つの非対称的な階層秩序であるとの考え方が、ポスト構造主義以降のジェンダー論の中で練り上げられ、定着してきた。したがって、現在ではセックスとジェンダーの区別にも慎重になっている。……セックスは生物学的事実で、ジェンダーは文化的構築物だとする考え方は、80年代以降のポスト構造主義フェミニズム、特に90年代のクィア理論によって覆された。……この理論では、むしろセクシュアリティも、ジェンダーの二分法によって異性愛秩序として構築される

ものとなる。ここにおいては、セックスもセクシュアリティもジェンダーと見なされ……。以上から分かるように、我々にとっての「性」の概念の機軸が、生物学的な「セックス」から人間学的な「セクシュアリティ」に移るにつれて、「ジェンダー」概念は、「セックス」や「セクシュアリティ」のそれぞれを「男／女」に二項目化する知の働き、知の力として捉え直されるようになった。こうした展開を受けて、千田有紀は「ジェンダー」をこう説明している。「『生物学的』に決められているとされる「セックス」である「男」と「女」のカテゴリーのどちらかに、私たちを割り振ろうとする力のことを、「ジェンダー」と呼びます。ここでいうジェンダーとは、つまり私たちを2つに分けようとする力、性に関する言語使用、つまり性に関する知のことです。」（『ジェンダー論をつかむ』p14）このように、「ジェンダー」は、たんに社会的・文化的につくられた性別というだけでなく、我々を「男／女」の二項に強制的に割り振ろうとする「知の力」として捉え直された。とすれば、そのような「力」によって、我々の「セックス」や「セクシュアリティ」はどのような影響を受けるのだろうか。現代における「ジェンダー」は、このように問題を立てるのである。

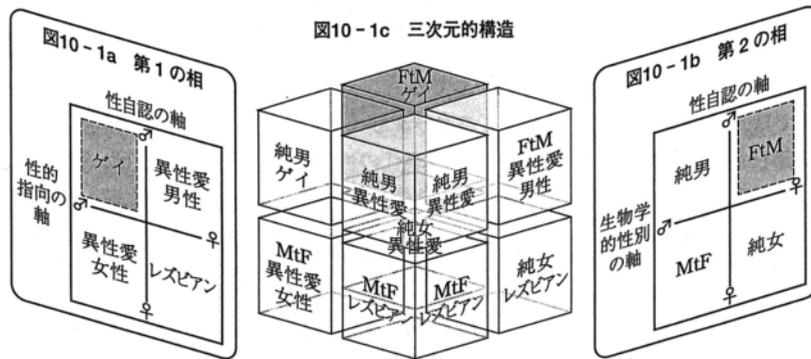
II ジェンダー化されたセクシュアリティ

「ジェンダー」とは、我々を「男／女」の二項に強制的に割り振ろうとする知の力だとすれば、そこには、「セクシュアリティのジェンダー化 genderization of sexuality」あるいは「ジェンダー化されたセクシュアリティ gendered sexuality」という問題状況が見えてくる。生物学的な「セックス」と社会的文化的な「ジェンダー」という二分法では、両者が領域として区別され対置されるが、すべての有性生殖生物に汎通的なオス・メス規定と、独自の進化と歴史の中で社会と文化を作り上げてきた人間の「男」「女」とでは、あまりにも両者の距離がありすぎて、相互の関係はよく見えてこない。そのような対置図式においては、生物学的な「セックス」がどのように社会・文化的な「ジェンダー」を形成し、制約しているのかという、「セックス」→「ジェンダー」の一方向的な因果関係のみに注意が向きがちである。このような因果関係は、それが科学的に正確な理解であるならば、もちろん否定されるべきではないだろう。だが、重要なことは、因果関係は決して一方的ではなく、相互作用的な側面もあるはずである。つまり、そもそも何が生物学的で自然であるかを決めるのは人間の知であり、自然と人為の境界を定めるのも人間の知である。つまり、「自然」とか「生物学的」という規定そのものが、人間の創り出した規定なのである。とすれば、「ジェンダー」→「セックス」という因果関係も当然考えなければならない。とはいえ、有性生殖生物に汎通的なオス・メス規定と、人間のジェンダーとしての「男／女」の間には、あまりにも大きな距離があり、どちらの方向の因果関係を考えるにしても、まだきわめて漠然としたことしか言えない。しかし、生物学的な「セックス」ではなく、人間学的な「セクシュアリティ」ならばどうだろうか。現に生きている我々自身が持っている性的な欲望、イメージ、意識ならば、それは我々の「知」に近い位置にあり、したがって社会的・文化的な「知の力」である「ジェンダー」との距離がずっと近いものになる。そのような「セクシュアリティ」と「ジェンダー」ならば、両者の相互関係を見て取ることも可能ではないのだろうか。このような問題意識のもので、「セクシュアリティのジェンダー化 genderization of sexuality」あるいは「ジェンダー化されたセクシュアリティ gendered sexuality」を考察してみよう。

この問題について考察した重要論文として、石田仁「セクシュアリティのジェンダー化」（江原・山崎編『ジェンダーと社会理論』、有斐閣、2006、所収）がある。石田論文には下記の図が掲載されており、この問題を考える上できわめて有益なので、本稿では、この図に従ってそれを読み解く作

業を試みてみたい。この図は含意が大きく、我々に大きな課題を突き付けているからある。

図10-1 現代の性の解釈枠組み



(出所) Ishida and Murakami (2006) を改変。

図 石田仁氏による「セクシュアリティのジェンダー化」の図⁽³⁾

この図はかなり複雑なので、それが意味するところを順に考えていきたい。論じやすいように、図の各部分を指示する新たな呼称を付けることにする。まず全体の構造は、三本の座標軸によって作られる三次元空間である。「性自認」の軸によって上下が、「性的指向」の軸によって左右が、そしてさらに「生物学的性差」の軸によって左右が、それぞれ区分され、全体が8つのブロックから成っている。この全体を一つの「建物」とみなして、以下のように呼ぶことにしよう。

- (1) 8つのブロックのうち、下の四つを「1階」、上の四つを「2階」と呼ぶことにする。すると、1階と2階の区別は「性自認」軸の区別の上下に相当するから、2階は「性自認が男」が住み、1階は「性自認が女」が住む部屋になる。要するに、2階に住んでいるのはすべて「男」、1階に住んでいるのはすべて「女」である。ただし、重要なことは、ここで言う「男/女」は、生物学的性別ではなく、あくまで「性自認」による「男/女」だから、意識のレベルに存在する、ジェンダーとしての「男/女」であることである。
- (2) 8つのブロックのうち、手前の上下二つとその左側の上下二つを合わせた四つを「南側」と呼ぶ。また、残りの四つを「北側」と呼ぶ。すると、南北を区切るのは「生物学的性別」の軸だから、建物の南側に住んでいるのはすべて「生物学的に男」、北側に住んでいるのはすべて「生物学的に女」になる。ただし、注意すべきことは、生物学的な「男/女」は、性自認としての「男/女」と同じではないことである。たとえば、「生物学的に男だが自分を女と認識している人」、つまり性同一性障害の人がいて、これは「M to F」(Male to Female) と表示され、逆は「F to M」と表示される。北側2階には「生物学的に女だが自分を男と認識している人」(F to M) が住み、南側1階には「生物学的に男だが自分を女と認識している人」(M to F) が住んでいる。それに対して、生物学的性別と自分の性自認が同じ人は、それぞれ「純男(すみお)」「純女(じゅんめ)」と呼ばれ、それぞれ南側2階と北側1階に住んでいる。
- (3) 次に、建物を南側から見た断面(図の「第1の相」)を考えてみよう。「性的指向」の軸によって西側と東側に区切られ、西側はすべて「男を指向(欲望)する人」が住み、東側はすべて「女

を指向（欲望）する人」が住んでいる。だが、この断面には下記の新たな注意が必要である。

この東西に区別されたブロックにおいては、そこに住む主体は、(1)(2)と違って、「男」や「女」という「自分の性別」によっては規定されていない。「自分の」性別ではなく、自分が「指向（欲望）する対象」の性別、つまり、「指向（欲望）対象の」性別によって自分が何であるかが規定されている。自分の生物学的性別は、自己の身体の生物学的レベルでの事実であり、自分の性自認は自分の意識というレベルの事実であり、それは自分自身に即して決定されるもので、外部を参照する必要はない。それに対して「性的指向（欲望）」は自分の外部に存在する対象によって自分が規定されるという反射的・反省的な規定である。

このような反射的・反省的な規定である「性的指向」によって自己の「性」を捉えるところが、「セックス」とは異なる「セクシュアリティ」の最大の特徴である。とはいえ、「自分の性別が何であるか」という規定に、生物学的性別や性自認に加えて「性的指向」が加わることは、事態を複雑なものにする。「性自認」の軸で見れば、2階に住むのは「男」、1階に住むのは「女」であり、「生物学的性別」の軸で見れば、南側に住むのは「男」、北側に住むのは「女」であると、単純に言えた。つまり、「そこに住んでいるのは誰か？」という問いに、一応は一言で答えられたのである。だが、「性的指向」による区分軸が加わると、そう簡単にはいかない。「男を指向（欲望）する人」「女を指向（欲望）する人」と言っただけでは、その「人」が「男」であるか「女」であるかについてはまだ何も言っていないし、その「男／女」が生物学的性別なのか性自認なのかについても、まだ何も言われていない。「性的指向」の区別軸は、「異性愛／同性愛」という規定を与える軸なのであるが、以上から分かることは、「異性愛／同性愛」という規定は実は関係規定であり、複雑な要素を含んでいることである。

我々は通常の日常生活においては、「異性愛／同性愛」という区別を漠然と考えているだけで、主体のアイデンティティに関わる「性自認」も含めて関係規定として理解してはいない。「同性愛」が複雑な規定を含むのと同様、「異性愛」もまた単純な一枚板のものではないのである。この図を手掛かりに、「異性愛／同性愛」と性同一性障害の複雑な関係を考えてみたい。

Ⅲ 「異性愛／同性愛」と性同一性障害

ここで、この図をもう一度よく考えなければならない。日本語で表記されているが、「性自認」「性的指向」という語は、本来は英語である。「性自認」は「ジェンダー・アイデンティティ gender identity」]、「性的指向」は「セクシュアル・オリエンテーション sexual orientation」]。日本語では「性」という一語に統合されているが、「性自認」の「性」と「性的指向」の「性」は別の語なのである。この図は、第1の相も第2の相も、縦軸がどちらも「性自認 gender identity」]であることに注意しなければならない。「セクシュアリティのジェンダー化」を示すために、「性自認 gender identity」]である「男／女」の二分法が他の要素とどのように関連しているかを表示することがこの図の目的だからである。横軸は、第1の相は「性的指向 sexual orientation」]であり、第2の軸は「生物学的性別 biological sex」]である。つまり、この図は、(1)ジェンダーとしての「男／女」、(2)セクシュアリティ、(3)セックスという三者の関係を表現する、性別の根本図式ということになる。

この図には、南側から見た「第1の相」と東側から見た「第2の相」が書かれている。8つのブ

ロックからなる三次元空間であるので、上（あるいは下）から見た「第3の相」があってもよきそうだが、書かれていない。これはなぜだろうか。仮に上から見た「第3の相」を想定すると、生物学的性別と性的指向の二つの軸からなる座標平面になる。ただし、「性自認」の軸はないから、ジェンダーとしての「男／女」の区別はこの平面には現れない。「性自認」がないということは、動物としての生物学的性別はあっても、人間として自分が男か女かを知らないということである。それでも無理に「第3の相」を考えて、上から建物を眺めたとしよう。すると、東南ブロックは(a)「生物学的に男で、女性を指向」、(b)西南ブロックは「生物学的に男で、男性を指向」、西北ブロックは(c)「生物学的に女で、男性を指向」、(d)東北ブロックは「生物学的に女で、女性を指向」になる。この問題について無知な人がこの「第3の相」を眺めたら、この区分は、異性愛と同性愛の違いを表していると素朴に考えてしまうであろう。(a)(c)が異性愛、(b)(d)が同性愛であり、それ以上は何も考えないであろう。だが、それは間違いなのであって、1階と2階の区別をもたない視点、自分を「男」とみなすか「女」とみなすかという「性自認」が抜けている。「性自認」という契機を欠けば、実は、異性愛も同性愛も正確には定義できない。なぜなら、同性愛は、自分が「男／女」であるという認識があってこそ、「同性を指向（欲望）する自分」という関係認識が成り立つからである。同様に、異性愛も生物学的性別から自動的に成り立つわけではない。そもそも異性愛の人々の多くは、生物学的性別と性自認が一致しているので、両者を区別することすらもしていない。同性愛や性同一性障害のことを知って初めて、生物学的性別と性自認が違うレベルのものであることを知るのである。異性愛も同性愛も、生物学的性別だけから生じるのではなく、自分を「男／女」と自覚する「性自認」がなければ不可能であることは、たとえば恋愛を考えてみれば分かるだろう。以上の理由から、この図には「性自認」を欠いた「第3の相」は不要なものとして、書かれていないのだろう。

この図は、同性愛と性同一性障害の区別と関係を表現することができる。「第1の相」から眺めれば、「同性愛／異性愛」という区別と「ゲイ／レズビアン」という区別の位相が見えてくる。また、「第2の相」から眺めれば、「生物学的性別／トランスジェンダー（＝性同一性障害）」や「MtF／FtM」という区別が見えてくる。第1の相（「セクシュアリティ／ジェンダー」の平面）と、第2の相（「セックス／ジェンダー」の平面）との二つの平面が組み合わされることによって初めて、同性愛と性同一性障害の複雑な関係が理解できる。というのも、生物学的性別と性自認を区別する第2の相があつて初めて、性的指向を区別する第1の相が表示するところの異性愛の主体にも同性愛の主体にも、それぞれ生物学的性別と性自認が異なる場合が含まれることが分かるからである。そして、「同性愛」と「性同一性障害」とをいっしょくたにして「オカマ」と呼ぶというような誤りも明らかになる。

とはいえ、三次元空間の8つのブロックを用いて性別を分類したこの図は、「男／女」という厳格な二元性による「性自認」のもたらず問題点をも明らかにする。石田仁論文の主眼はむしろこの点にあり、この図による分類は、同時に、同性愛や性同一性障害の人々がよく理解されてこなかった理由についても照明を当てる結果になるからである。それはどういうことだろうか。まずこの図の8つのブロックのうち、4つは、特にこの図を用いなくても、我々に分かりやすい性別と言える。まず2階の東南ブロック、すなわち2階の手前にあるブロックは「生物学的に男、性自認も男、指向は女性」であり、いわゆる異性愛の男。また1階北西ブロック、すなわち1階の奥に隠れて見えないブロックは「生物学的に女、性自認も女、指向は男性」であり、いわゆる異性愛の女である。この両者が人数的には多数派で、異性愛カップルを形成する。次に同性愛だが、2階の西南ブロックは「生物学的に男、性自認も男、指向は男性」で、いわゆる「ゲイ」。1階北東ブロックは「生物

学的に女、性自認も女、指向は女性」で、いわゆる「レズビアン」。この4ブロックは我々によく知られている性別と言える。だが残りの4ブロックについては、どうだろうか。

まず2階北西ブロックは「生物学的に女だが、性自認は男、指向は男性」なので、「FtM ゲイ」、すなわち「性同一性障害でゲイ」になる。石田論文によれば、「FtM ゲイという表現はたしかに珍しく、また著しく複雑な性のありかただと思う人もいるかもしれないが、実際にそう名乗る人・名乗られる人はいる」とされている⁽⁴⁾。そして、1階東南ブロックは、「生物学的に男だが、性自認は女、指向は女性」なので、「MtF レズビアン」、すなわち「性同一性障害でレズビアン」になる。石田論文は特にコメントしていないが、「FtM ゲイ」と対の位置にあるので、そのような人はいるであろう。上に述べたように、同性愛と性同一性障害をいっしょくたにして「オカマ」と呼ぶのは誤りであるが、両者が区別された上で、両者を併せ持つことがありうることを、このブロックは示している。とはいえ、「FtM ゲイ」も「MtF レズビアン」も、それなりに「複雑な性のありかた」であるとは言えるだろう。では最後に残った2つのブロックはどうか。1階南西ブロックは「生物学的に男だが、性自認は女、指向は男性」で、「MtF 異性愛」、すなわち「性同一性障害で異性愛」になる。また2階北東ブロックは「生物学的に女だが、性自認は男、指向は女性」で、「FtM 異性愛」、すなわち「性同一性障害で異性愛」になる。この二者についても石田論文はコメントしていないが、当然そのような人は存在するであろう。とはいえ、この4つのブロックはそれなりに「複雑な性のありかた」であって、最初の4つのブロックに比べるとイメージしにくいことも事実である。その理由は、この4つのブロックがいずれも性同一性障害に関わるブロックであるという点に求められるだろう。「性同一性障害」という概念は本来、医学的概念であり、それはさらに広い「トランスジェンダー」という概念の一部をなしているからである。

石田仁論文は、「トランスジェンダー」について、次のように説明している。「トランスジェンダーには広義と狭義の用法がある。(広義の)トランスジェンダーとは、性別を越境したいと考える人びとの総称である。この中で、生物学的性別に強く持続的な違和感をもっていて、そのことが個人生活や社会生活に支障をきたしていると精神科医が判断した場合、性同一性障害という診断名が下される。性同一性障害を抱える者のうち、さらに性別適合手術(「性転換手術」)を受けなければその違和感が解消されない人々をトランスセクシュアルという。これに対して、こうした医学的な解釈、医学的な囲い込みを拒否する人びとを(狭義の)トランスジェンダーという。」⁽⁵⁾ここから分かるように、生物学的性別に強い違和感を持ち、性別適合手術を受けた、あるいは受ける準備をしている人々、すなわちトランスセクシュアルの人々のことを考えるならば、「FtM ゲイ」「MtF レズビアン」、あるいは「FtM 異性愛」「MtF 異性愛」という性別のありかたを、ある程度理解することができるだろう。これらの人々の場合、「性同一性障害」による強い違和感は、異性装を趣味で楽しむといった表層レベルのものではなく、ずっと深刻なものである。2003年に国会で成立した「性同一性障害者特例法」によって、一定の条件を満たした者には戸籍上の性別変更ができることになった。ホルモン療法や性器に関するさまざまな手術など、テクノロジーの進歩にも助けられて、性別適合医療や手術は実際に行われているのである。この問題についての専門的研究者である市野澤潤平氏の論文によれば、「2007年度末までに、全国の主要専門医療機関における性同一性障害受診者の総数は、7000名を超える」⁽⁶⁾とされている。医療機関に行かず密かに悩んでいる人も多いであろうと想定されるから、「性同一性障害」は、ごく一部の人だけの問題では決してないのである。

ところで、石田論文の「ジェンダー化されたセクシュアリティ」の図は、「性自認」というジェン

ダーが、セクシュアリティと生物学的性別（セックス）との両方に二重に関わることを示しているが、それだけではない。石田論文をもう一度見てみよう。「FtM ゲイという表現はたしかに珍しく、また著しく複雑な性をあり方だと思ふ人もいるかもしれないが、実際にそう名乗る人・名乗られる人はいる。しかし「FtM レズビアン」という表現はどうだろうか。こちらは「ありえない」表現ということになっている。……FtM ゲイを「多様な性」の一つにカウントするのに、FtM レズビアンを……「多様な性」から除外する性の解釈枠組みとは、いかなる論理にもとづいているのか。答えはこうである。その論理は、第1、第2の相のいずれもがもつ性自認の要素を、共通の軸として貼り合わせることで実現しているためである。この独特な三次元構造の中には「FtM レズビアン」は定位できない。……この解釈枠組みの最大の特徴は、第1に、誰のセクシュアリティに関しても自動的に同定できるところにある。……三つの属性、すなわち、生物学的性別、性自認、性的指向さえ与えられれば、「この人のセクシュアリティは何か」という問いに関して、誰がやっても、しかも何度トライしても、同じ結果を導くことができる。〈客観的〉〈再現的〉〈決定論的〉な解釈枠組みであると表現できるだろう」⁽⁷⁾ 「FtM レズビアン」とは、「生物学的には女で、性自認は男、指向は女性」ということになるだろう。このような人は、存在しそうに思われるが、この図では「ありえない」ことになっている。その理由は、生物学的性別ではなく性自認こそが、主体の「男／女」を決めるものであるから、性自認が「男」であるならば、その主体は自動的に「レズビアン」ではありえないからである。せっかく生物学的性別の他に「性自認」という新しい性別の基準を立てたにも関わらず、性自認が「男／女」という二項に分離している限り、三次元空間で8ブロックでは、多様な性＝セクシュアリティのあり方をすべて捉えることができない。これが、「性自認」というジェンダーがセクシュアリティを決定するという決定論的な性別枠組みの問題性である。この図には、「FtM レズビアン」が登場できないだけではない。『ジェンダー論をつかむ』においては、この図では「バイセクシュアル」が表現できないことが指摘されている。「この図を見ていると、最初に問題にした性別二元論の無理もわかってきます。簡単な例をあげると、バイセクシュアルはこの図には存在しません。バイセクシュアルの人には、相手のジェンダーとは関係ないところに性的な関心が向かう人もいれば、男性にも女性にも同様に性的な関心を抱く人もいて、結果的に性的なパートナーは男女どちらでもありうる、ということになるのですが、そのような人々はこの図には収まりきれません。要するに、「男女」「同性」「異性」の枠では語ることでできない微妙なアイデンティティや関係は、この社会の性別二元論にのっとったこの分類では説明できないのです。」⁽⁸⁾ 同性愛と言われる人たちにも、結婚して子供を持つ人はたくさんいる。つまり、両方の性を指向することのできる「バイセクシュアル」の人は少なくないと考えられるので⁽⁹⁾、それが表現できないとすれば、この図には欠陥があることになるだろう。

IV 「ジェンダー」概念の複雑な性格

性別枠組みについての以上の考察においては、「性自認 gender identity」が重要な役割を果たしていた。「性同一性障害」という日本語は、もとの英語「gender identity disorders」のほぼ直訳であり、「性自認障害」と訳すことも可能かもしれない。ここで注目すべきことは、「ジェンダー」という語や概念が主に医学の文脈で用いられていることである。日本精神神経学会では、「性同一性障害」は「生物学的には完全に正常であり、しかも自分の肉体がどちらの性に所属しているかをはっきり認知しているながら、その反面で、人格的には自分が別の性に属していると確信している状態」と定義されている⁽¹⁰⁾。また、アメリカ精神医学会のDSM-IV（精神疾患の診断をくらすマニュアル、1994）にも「性同一性障害」は詳細に記述されている。もっとも、次期のDSM-5においては「性同一性障

害」の項目はないとも言われているので、この概念と医学との関係はそれ自体が問題になっているわけである。しかしいずれにしても、「性自認 gender identity」が医学の現場で問題化するということは、「ジェンダー」という概念も医学の現場で用いられることを意味している。しかもそれは「ジェンダー」概念の派生的・副次的用法というわけではないことに注意しなければならない。セックス＝自然的事実、ジェンダー＝社会的・文化的事実という旧来の漠然とした対置に捉われていると、このことが見落とされる危険があると思われる。「ジェンダー」という概念は、幅広くフェミニズムの文脈で使われているが、概念の歴史を見れば、医学の現場に登場し、用いられてきた経緯があるのである。この側面を見落とすわけにはいかない。

高橋さきの「身体性とフェミニズム」(2006)は、「ジェンダー」概念が医学に登場する過程を考察しているので、それにしたがって概観してみよう。高橋論文によれば、現代の英語圏においては、「ジェンダー」は生殖に関する医学用語としても用いられている。妊娠した後に胎児の性別を判定するのは「ジェンダー検査 gender test」であるし、男女の産み分けは「gender selection」と呼ばれることが増えたという⁽¹¹⁾。ここではむしろ生物学的な性別が「ジェンダー」と呼ばれているのである。「ジェンダー」概念が医療現場に登場したのは1950年代で、小児内分泌学の領域であった。染色体の観察方法、ホルモン投与など、医学が進歩して、生まれてきた新生児の性別異常、すなわち性分化・発達の異常を治療できるのではないかという希望が生まれた。その医療チームに加わったのが、心理学者のジョン・マナーであった。マナーが導入したのが「ジェンダー役割」の概念であり、子供の言動や振る舞いを見て医療者が男女を判定するものであった。マナーらは、この「ジェンダー役割」と各種要因(染色体の性、内部生殖器官の性、ホルモン上の性、外性器の形状、どの性として育てられたか)との相関を調べ、外性器の形状とどの性として育てられたかの二つが「ジェンダー役割」ともっとも相関が高いと結論した。そして、新生児の外性器の形状に応じて男女いずれとして育てるかを医療者主導で決め、積極的に外科手術を行って外性器等の形状を変更し、並行して適宜ホルモン投与を行うという治療方式が確立され、ほぼ40年続いたという。ここで重要なことは、従来は性腺だけから性別が決定されたのに対して、各種要因を総合して性別を判定するという方式に変わったことであり、この総合の過程で「ジェンダー」という概念が必要になったわけである。「性自認 gender identity」という概念は、こうした医療の流れの中で、精神科医のロバート・ストローラーが1964年に提唱した概念である。それは、「本人が自らをどの性 (sex) に属すると考えているのか、すなわち、みずからを女性、男性のいずれと考えているのかについてのセルフイメージ」として定義された。「性自認 gender identity」が、本人のセルフイメージに関わる概念として概念システムの中核に配置されたことで、この概念はこの分野の骨格概念となり、臨床用語としても定着し、この分野のその後の安定的推移が可能になった。「性自認 gender identity」という概念は、強固な性的二元性を前提しているという問題は孕んでいるが、当時は、医療現場の最先端をゆく、希望に満ちた新鮮な存在だったのである。この「ジェンダー」という概念が、その後、医療観察の現場を離れて、自然対文化の二項対立関係の一変種として理解されるように変容していったのである。高橋論文は、以上のように概念の成立史をまとめている(前掲書 p141~p144)。

V 自由な心身関係・自己関係としての性

以上のように、「ジェンダー」概念の成立系譜の一つが医療現場であり、「gender test」「gender selection」などの語の用法が生物学的性別「セックス」にかなり近いところにあるように思われるとしても、しかし、「ジェンダー」が「セックス」から区別して成立した意義は、計り知れないほど

大きい。それは、性腺などさまざまな身体的要素の集合が我々の生物学的性別を潜在的に構成しているとしても、それが直ちに我々自身の性別「である」のではなく、それらの諸要素を「総合」して性別を成立させるのはあくまで一つ概念であり、その概念には「性自認 gender identity」という自己認識の要素が不可避的に含まれるからである。「概念」とは、ヘーゲルが明らかにしたように、その中に矛盾と対立と否定性を含んでいるがゆえに、自由な存在である。「ジェンダー」もまたそのように理解されなければならない。ジュディス・バトラーは、「そもそもセックスとジェンダーの区別は、〈生物学は宿命だ〉という公式を論破するために持ち出された」と述べている⁽¹²⁾。これは正しいが、しかし「論破」とは、生物学を力づくでねじ伏せて支配下に置いたり、生物学的事実を無視することではない。概念には否定性が含まれ、それゆえ自由な存在であるのは、その中の対立する諸要素が因果的な支配・被支配関係にあるのではなく、志向的・意味的に「総合」されているからである。つまり、概念は人間の自覚と意識を媒介して統一されている。概念が概念として機能するとき、概念は自らの内に動きを含んでおり、それゆえ生命を持っている。「ジェンダー」とは、そのような意味で、我々の「性」を意味するはずである。「ジェンダー」はそれが我々の自覚的な「性自認」であるという点で、たしかに「セックス」を含んでいる。しかしより正確に言えば、「ジェンダー」により近い所にあるのは「セックス」よりも「セクシュアリティ」であり、「ジェンダー」とは、それが「セクシュアリティ」を統合するという点に、自由な存在としての概念の真骨頂があるはずである。「セクシュアリティ」概念の優れたところは、生物学的な「セックス」と違い、性的指向、すなわち自分が指向する他者によって再帰的・反省的に定義される契機を含んでいるところにある。「性自認」はこれを含まない限り真の「性自認」にならない。我々は自分の生物学的性別が何であれ、男性を指向することも女性を指向することもありえるだけでなく、そもそも男性も女性も指向しないこともありうる。このような否定性を含むがゆえに、「セクシュアリティ」は「セックス」よりも、それだけ自由な存在なのである。「セックス」のレベルで捉えられたとき、同性愛や性的無指向であることは、ヘーゲルの言う「差異性」の段階にあるにすぎないが、「セクシュアリティ」のレベルで捉えられたときには、同性愛や性的無指向は「否定性」の契機をもち、概念としての「性自認」、すなわち自己の「性」を新たに再定義する力として自由な存在になっている。「セクシュアリティのジェンダー化」とは、事柄としてそのようなものでなければならない。

「セクシュアリティのジェンダー化」は、そのこと自体がネガティブに捉えられるべきではない。石田氏が指摘するように、現代における「セクシュアリティのジェンダー化」が、まだ「強固な性的二元性」に捉われており、それゆえの息苦しさ、生きにくさがあるのだとしても、人類の長い進化の歴史を通じて、我々が単に生物学的なオス・メスであるのではなく、「私は男なのだ」「私は女なのだ」という「性自認」を持つことによって、我々の性は動物の性に比べてより自由な存在になったことを見落としてはならない。人間の女性は外部から排卵期が分からないことによって、動物のような自動的・受動的な交尾ではなく、男性に対してはるかに自由な性関係を持つことになった。性が、生殖としての性という意味だけではなく、コミュニケーションとしての性という意味を持ち、「性」という概念にそれらの契機が含まれるようになったことは、「性」という概念が一層自由になったことを意味している。コミュニケーションとしての性には、他者に対する再帰的定義としての性的指向が含まれており、セックスはセクシュアリティにならなければならない。そうしたセクシュアリティのレベルの「性自認」によって初めて、コミュニケーションとしての性が可能になる。ブルーノ『失われた時を求めて』には、たくさんの同性愛が詳細に描かれている。ヒロインのアルベルチーナは、少年と少女が合体したようなバイセクシュアルの女性であり、限りない魅力を持っていると同時に、深い「謎」でもある。『失われた時を求めて』は、コミュニケーションとしての性

を主題とし、それを描いた作品であると言えるかもしれない。同性愛や性的マイノリティ、あるいは異性愛者にも含まれる両性具有的な契機は、コミュニケーションとしての性を一層豊かにするものとして捉え返されたとき、偶然を必然に変える「自由な性」になるだろう。

註

- (1) 訳語は、ラブランシュ・ポンタリス『精神分析用語辞典』、西園昌久監修『現代フロイト読本1、2』、フロイト『エロス論集』などで異なる。
- (2) 『現代思想 特集=フーコーは語る』(1984年10月号)における座談会の発言。
- (3) 石田仁氏のこの図は、江原・山崎編『ジェンダーと社会理論』p156による。
- (4) 石田仁「ジェンダー化されたセクシュアリティ」、前掲書 p156
- (5) 石田仁「ジェンダー化されたセクシュアリティ」、前掲書 p153.f
- (6) 市野澤潤平「越境としての「性転換」—「性同一性障害者」による身体変工」(2009、奥野克己他編『セックスの人類学』所収、p296)
- (7) 石田仁「ジェンダー化されたセクシュアリティ」、前掲書 p156.f
- (8) 千田有紀・中西祐子・青山薫『ジェンダー論をつかむ』(2013、有斐閣、p188)
- (9) プルースト『失われた時を求めて』のヒロインであるアルベルチヌスは、男性である語り手「私」の恋人であると同時にレズビアンでもある。『失われた時を求めて』には同性愛者がたくさん登場するが、その中にはバイセクシュアルも多い。
- (10) 市野澤論文、前掲書 p295
- (11) 高橋さきの「身体性とフェミニズム」(2006、江原・山崎編『ジェンダーと社会理論』所収、p139)
- (12) ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』p27

文献

- ・フロイト『エロス論集』(中山元訳、1997、ちくま学芸文庫)
- ・ラブランシュ／ポンタリス『精神分析用語辞典』(原著1967、邦訳1977、みすず書房)
- ・西園昌久監修『現代フロイト読本1、2』(2008、みすず書房)
- ・『現代思想 特集=フーコーは語る』(1984年10月号、青土社)
- ・岩波『女性学事典』(上野千鶴子他編、2002、岩波書店)
- ・フーコー『性の歴史 I 知への意志』(渡辺守章訳、1986、新潮社)
- ・ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』(原著1990、竹村和子訳、1999、青土社)
- ・ジェファニー・ジャーモン『ジェンダーの系譜』(原著2009、左古輝人訳、2012、法政大学出版局)
- ・パトリック・カフィリア他『セックス・チェンジズ』(原著1997、石倉由他訳、2005、作品社)
- ・江原由美子・山崎敬一編『ジェンダーと社会理論』(2006、有斐閣)
- ・千田有紀・中西祐子・青山薫『ジェンダー論をつかむ』(2013、有斐閣)
- ・奥野克己・竹之下祐二・椎野若菜編『セックスの人類学』(2009、春風社)
- ・石田仁「セクシュアリティのジェンダー化」(2006、江原・山崎編『ジェンダーと社会理論』所収)
- ・加藤秀一「ジェンダーと進化生物学」(2006、江原・山崎編『ジェンダーと社会理論』所収)
- ・高橋さきの「身体性とフェミニズム」(2006、江原・山崎編『ジェンダーと社会理論』所収)
- ・市野澤潤平「越境としての「性転換」——「性同一性障害者」による身体変工」(2009、奥野克己他編『セックスの人類学』所収)
- ・山内俊雄『性の境界——からだの性とこころの性』(2000、岩波科学ライブラリー74)
- ・中村美亜「心に性別はあるのか? ——性同一性障害のよりよい理解とケアのために」(2005、医療文化社)
- ・マナー／タッカー『性の署名』(原著1975、朝山新一他訳、1979、人文書院)
- ・ジョン・コピラント『ブレンダと呼ばれた少年』(原著2000、村井智之訳、2005、扶桑社)